

# 熱かつた夏

工藤久吉

(昭和6年春)

岩中の開校当時は、富国強兵からエスカレートして、そろそろ軍国時代に入る頃かと思われる。配属将校といわれる現役の下級将校による軍事教練なるものが学校の正科として取り扱われ、野外軍事教練はもちろん、雨天には教室で学科教練という時間があった。

熱い夏の炎天下で、編上靴にゲートルを巻き、重い歩兵銃を持って、「直立不動の姿勢」というのがその一例。

偶々、その教練の時間に教官殿から、今日は野外教練のかわりに水泳だという予報が入った。場所は雲石川と北上川との合流地点、というより雲石川寄りの流れのところには格好な場所があった。現在の岩手女子高校が岩中校舎であったから裸足で中津川を渡って現場へ行くのであった。

現場に着くや、いきなり水中に飛び込んで喜々として水泳ぎに余念ない迄は良かったが、途中で誰か水中の川底に一人沈んでいるとの知らせがあった。その地点を捜して引き揚げられたのが海野君という、久昌寺住職さんのお孫さんであった。とにかく、父兄であるお寺さんの方へ連絡しながら、人工呼吸やら色々手を尽したが水一滴吐くどころか、三時間目にでもかくれて食べたか飯粒が少々出て来るだけ。肛門が既に開いていた。

そこに駆けつけて来たのが住職さん、僧衣に夏

のヘルメット帽スタイル、人力車で駆けつけた次第、相当年長のお坊さんとみえ、やはり教頭先生のような長いヒゲがほとんど真白だったと記憶している。人力車から降りるやいなや死体に取りすがって涙をポロポロ流しながら大きな声で、「皆もこれからは決して川などで水泳ぎをやるんじゃない」と。圍りで黙って見ていた吾々生徒達は、子供ながら全く気の毒で何もいえない心境でした。裸でそこに茫然と立ちすくんでいた軍事教官が、その時何を思ったか、いきなり陸軍大尉の軍服を持って来て軍装し始めたのである。それから住職さんと将校さんとの口論が始まったのであるが、心臓麻痺で既に死亡した本人が今更生き還ってくるでなし、仕方のない話なのにも思ったあの時の光景が昨日のことのように今でもはつきりと記憶に残っている。

岩中行事の一つに、全校一同で校旗を先頭（略旗使用）に、年一度の岩手登山があった。柳沢の社務所に一泊、夜半二時起床、神主さんから清めのお払いを受けた後、手に手に提灯を照らし、延々五百人の行列で、一步一步登ったのである。

開校以来教頭職であったS先生で、「大学」という綽名の先生（大学目録のトレードマークに酷似していたからである）社務所での睡眠不足でもたたつてか、途中、山中で気分が悪くなったとか、禿頭の丸い頭から盛んに湯気をあげながら呼吸困難らしく、吐息も荒々しく、体育の先生が幾人かの生徒に手伝わせて下山を奨めた様であったが、「諸君は僕には構わず時間に遅れん様（山頂で日照を拝するのが定例であったから）どんだん先へ進み給え」と、途切れ途切れの言葉。それでも誰

かが金剛杖や棒切れを見つけて来て、急場の担架を造ってくれ、それに先生を乗せて、五、六人の生徒で、かわるがわるエッサエッサと担ぎあげる仕末。

遂に御来光（日照）迄にはとにかく登頂に成功したのだから若さという他はない。

登頂を極めた後は、雲石口の大地獄、小地獄などながめたり、明鏡止水型の旧噴火口の湖畔での休憩の時間には一銭銅貨をチリ紙に包んで湖中に投じ、その白い影が深い湖底に向って沈んで見えなくなる迄、暫らく時間がかかるのがみものであった。あとは雲石登り口を一路下山、途中で網張温泉に立寄って、一日休養するのが唯一の楽しみでもあった。終戦後事故死されたと聞いたが、二回生で大久保酒造枝（ミキエ）君の父さんで、雲石町で造り酒屋を経営しておられた方が、この温泉の持ち主でもあったので、多分雲石町からであろう食糧などが運びあげられて御馳走に預かるのが通例であった。

先生方にはお膳の座席が設けられて、一献傾けるといふのに、その夕餉の途中、隣りの先生方の部屋で、突然大きな声で何かもめごとが始つたらしい。襖のすきまからそっと覗き見をしたところ、例の軍事教官と大学先生との口論沙汰。その口論の争点は、座席順番のことらしい。「校長は、正六位勲六等だから床の間の正座であつて然るべきだが、吾が輩は弱年とはいえ、教頭とは同位階勲等であっても武官であるから文官である教頭の下座に座するのは不快千萬である」との主張、それが論争の発端らしい。別名ダルマ校長と異名のあつた校長先生は一言も発せず、坐禪を組んで独り

冥想に耽つておられる格好。

結論はどうなったことやら、一向記憶にないが、多分幹事役の島軒先生あたりが事穩便に丸めたところろろが落ちであつたらう。

ところで、当時の先生方は無論既に他界され、二度と御会いするすべもない訳だが。

以上雑言申し上げたことは何卒御寛恕の程、そして改めて御冥福をお祈り申し上げる次第です。

## 太空庵先生

目時隆太郎

(昭和8年生)

此の間、探しものがあつて押入れを開けたら、十文字にく、った古い封書や、はがきの束が出て来た。何げなくほどいて次々と見てゆく。戦前戦中のものである。父からのもの、会津の教え子からのもの、友人からのもの、それに太空庵先生から戴いたものが四五通あつた。

転住やら疎開やらで、もうとつくの昔に散逸させて仕舞つたものとはかり思つていた私は、それだけに胸をときめかしながら読み耽つた。

独特な風格のある先生の御筆跡は、まことに懐かしい。先生の御人格が今に迫つて来る思いがした。昭和十四年、まだ就職難の頃であるが、就職について御心配をいたゞいたこと、昭和十八年、父の病によつて盛岡に転任しなければならなくなつた際の、一方ならぬお骨折をいたゞいたことなど濃やかに親身も及ばない程の御親切を寄せていたゞいたのである。今更の様に今はじき先生の御恩を深かめると共に吾が身の不甲斐なさを恥じた

ことである。

私は在学中から先生を特に尊敬申上げた。先生は詰襟の服をめされ、帽子は俗にいうワツパシヤポで、校章を光らせながらステッキをつき、風呂敷包を小脇にか、えられて御出勤なさる途上、よくお会いした。威厳の中にも親しさを感じていたものである。

先生についての思出は限りなくある。毎日の様に行われた朝礼、そのお話はたいてい身近かなことであつたが、先生の御人格から滲み出たもので当時の私達の徳性にどれ程しみ透うたことかはかり知れない。

私は精々月に一度の全校ガイダンスをとつていゝるがそれさえもお手挙げの態である。朝礼の際はきまつて御老令の山田仁三郎先生が立たれたま、速記をされ、学期に何度か「石桜」という新聞に掲載されたものである。

何時ぞや山中校長さんと談偶々先生のことに及んだ際、校長室の戸棚の奥深く保存されてある創刊号からの「石桜」綴をお見せいたゞいて感慨を新たにすることがある。石桜精神の源が秘められている……何時かお借りして読んでみたいと思つている。

蛇の島は三田さんの農園で、そこに遠足が企てられたことがあつた。丁度その頃、農園には西洋スグリが房々と赤く熟していた。私達はどうせ三田さんのものと甘え心もあつて、寄つてたかつて瞬く間に平げて仕舞つた。そのスグリはジャムの材料となる値のするのだつたさうである。太空庵先生が早速三田さんから大変お叱りをうけたという一件があつて、その翌日でもあつたらうか。多

分日曜だつたと思うが、全校生徒登校を命ぜられた。和服姿の先生が何時に变りなく、怒らず、力まずこんくと諭された。確かに当時の私達の何げない仕業にも、何か強く考えさせられたつたことを思出す。

勤労園の作業、山野の跋涉、妙泉寺山の兎狩、寒稽古納会のお汁粉、マラソン大会の黒砂糖のお湯や蕨汁、観武ヶ原でのクロスカントリレース、その際の野外炊事の豚汁等々、すべて先生の御方針によられたものと思うが、当時の学校行事を今にして思えば、先生の御高見が察せられ、人間形成の要素として如何に大事なものを痛感する。とかく昨今の様に公私立を問わずそら学力向上だ、大学入試だと、一寸誤れば大事なものを失つて、ガリ勉を強いる結果となる懼なしとしないことを思うにつけて、まことに特色豊かな学校経営をされたものだと頭が下がる。

先生は自然に親しむこと、勤労を愛好すること、を強調され、人格主義の教育を標榜された。私の心に今でも焼きついていることは、或る点では多少劣ることがあつても、この点では他に一歩も引をとらぬぞという優越感をもつて努力せよとおそわつたことがある。

私に限らず、五回生あたりまでのどなたも想起していただけると思うが、校舎内外の大清掃を初めとして学校行事すべて職員生徒一丸となつて當つたもので、正にパイオニヤスピリットが充ち満ちていた。

栃木県女子師範学校校長を最後におやめになられた先生は、郷土の子弟教育のため、いち私立学校の初代校長を御決意されたものだったという。に

も拘らず草創間もなく、呉の中学校長として御業  
転はなされたもの、その間何か仔細の事情もあ  
られた様である。当時私は四年生であつたと思  
うが、夜分公園の広場に級友相集つて先生のお宅を  
訪れ御留任をお願いしたことを思出す。事情はす  
でに私達の力では及ぶべくもなく、お別れしなけ  
ればならなくなつた。

告別式の場面が今日なお髣髴として蘇つて来る。  
講堂の隅々からずり泣く声が増して来る。私も  
胸がつまつて、遂床の上に大きな涙のこぼれるの  
を止め得なかつた。その時のお話のうち私の記憶  
に残っていることは、岩手山麓に放牧されて悠々  
と草をはんでいる馬が、南部の駿馬として天下に  
名だたる様に、やがて君達の中からもきつと国家  
有為の人材が出て来るであろう。それを期待して  
止まないと申されたことであつた。

私達は創立まだ浅い母校の三回生となるべき者  
としての責任を感じると共に、先生の御精神の発  
揚と校運の降昌を念じつ、努力を誓つたのであつ  
たが、お別れ後はとかく問題を起しがちで、級友  
間でリンチもあつた。銀行のバニックで修学旅行  
の積立金がとれなくなる。遂ぞ生涯の思出となる  
べき旅行も出来ずに仕舞つた。あれやこれやで私  
達三回生は何かしらその後の母校というものに疎  
ましくなつた様に思われる。

岩手山頂に建てられた先生の揮毫にかゝるあの  
「皇風永扇、校運降昌」という校旗樹立の記念碑  
に私の心が結びつく。脚絆をつけ、草鞋をはかれ  
て先頭切つて記念登山をなさつた先生のお姿が目  
に浮かぶ。……高き遠きにあこがる……大沢川原  
もとをおく、吾が中学の同じ窓……母校今日の発

展を喜ぶにつけて、太空庵先生が無性にお慕わし  
く思われてならない。

(「石桜同窓会報」創刊号所載)

## 滅の実践

日野岳 浩

(昭和7年卒)

軍国主義時代に育つた我々は、八幡宮、桜山神  
社の祭典にはかならず武装して、神前に、捧げ銃  
の参拝であつた。かえつてくると銃の手入れをし  
なければならぬ。日本の国は、神国であり、現  
人神としての天皇を、この上ない尊いお方と思  
つて、忠誠を誓わされたものであつた。

その時代に鈴木卓苗校長は月曜日の朝礼に仏教  
の教をとかれていた。漢文の山田老先生は、それ  
をノートにとられて居つたのを思い出す。校長先  
生は、ノートをとられるほど、偉い人かなと思つ  
たものである。今になって考えて見ると、仏教の  
根本義である四諦八正道である。四諦とは、苦、  
集、滅、道である。

人間は苦しみがかならずともなう、生きてい  
る間は、苦の連続であるという。苦しまなければ、  
人間は、ゆたかな内容にはならない。人間は、苦  
の前提の中に生きるというところに尊さがある。  
しかしその苦しみから逃れようとする我執が出て  
くる。それが集である。

苦しみをすなおにうけいれるところに我執とい  
うことが理解される。その理解から自覚と反省が  
生まれる。その反省から仏教的な正しい滅がある。  
滅の実践が重要であるとかれる。それが中道で

あると。当時は、弁論部があつたが、正語会とい  
うた。その正語は、八正道、つまり、正見、平思  
惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定。正  
見は四諦を理解し、苦しみがわかり、欲望を抑制  
し、仏教の内容、八正道を自覚し、仏教的な正し  
い見解、思想を實踐するには、正しい言葉によつ  
て、語ることが大切であるという仏教的実践道で  
教育の目標であつたと思われる。

中学四年のときであつたと思うが、正語会の大  
会に、私は「萌出づる力」という演題にて壇上に  
立つたとき、途中で、つまり、みんなに読めく  
と弥次られ、そのまま原稿をよんだことを思いだ  
す。後で校長先生から「お前の弁論は弁論ではな  
い。朗読したことは正語という実践道からはずれ  
ている」と叱正されたことがあつた。

また修身の時間に居眠りをして、ごつんとやら  
れ、後で校長室によばれ、「お前は将来寺の住職  
になる人である。居眠りとはもつての外である。  
もつと真剣に学問をなし、四諦八正道の實踐者と  
して、恥じない行ないをするんだ」と諭されたこ  
とがある。

今は時代がかわつて、民主主義、人間中心に考  
えてよい時代であるが、それはあまりに自己本位  
になつてゐる。苦しみ、悩みがない生活、物質的  
欲望の中に生きることが、最高である様に感じら  
れる。

私は、中学から大学、軍隊、教員生活、現在、  
寺に居るからかもしれないが、現在一貫したも  
のは、中学時代の仏教的実践道が、身につけてい  
ること。六十年間をささえてくれたものは、苦し  
みに耐える力が、心の底にあつたからと思われる。

歎異抄の第二章に、「親鸞におきては、ただ念仏して、彌陀にたすけられまいらすべしと、よき人のおおせをこうむりて、信ずるほかに別の子細なきなり。念仏は、まことに浄土に生まるるたねにてやはんべるらん。また地獄におつべき業にてやはんべるらん。総じてもて存知せざるなり。」

## 創立のころ

### 橋本英雄

(昭和6年卒)

四十有五年も経つた今日では、過ぎた日も、既に茫々として彼方に霞み、記憶もさだかではない。岩手中学校の創立は、大正十五年の春。入学式の式場に急ぐ道筋の公園の梅が、チラホラと散り始めていたのが妙に記憶に残っている。

入学試験は、県の物産館で行なわれた。今の県立の図書館のあるところである。往時の物産館は、当時としてはハイカラな洋館風の構えで、裏手には、明治時代のものと思われる古ぼけた大きな平家があった。そして、中津川沿いに、年代を経た気の利いた植え込みがあつて、亭のある築山をもちたてていた。それが、市の中心地に独特の風情をそえていた。我々受験生は、構内に敷きつめた玉砂利をききませながら、木造平家の試験場に向つた。入学式も同じ物産館で行われ、授業は今の杜陵小学校のある所で始められた。丁度、梅が散り始めたとき記憶している。この校舎も、すでに老朽し、窓や戸は障子張りの、いくなれば寺小屋

を大きくしたような木造の建物であつた。ここで新入生一同は一週間ばかり居候したと覚えている。さて、これから先、一体我々はこの校舎に入るものなのか、校章も決まっていなしいし、なにかしら一抹の不安はなかつた。

やがて、立派な校章も、入るべき校舎も決まつて、今までのモヤ／＼が一気に霧散し、大沢川原の校舎に納まつたのである。この校舎は、前は附属小学校が入つていたし、その前は白梅校（県立盛岡女学校）いまの二高が使つており、盛岡では由緒ある校舎であつた。中古の校舎であつたが、上級生のいない一学年だけの少人数の生徒には、ゆつたりして、かなりのスペースがあつた。校庭周囲には、桜の老木がならんでいて、春ともなれば、枝もたわわに繚乱と花を咲かせていた。花吹雪の校庭で、テニスをしたことなど、昨日のように鮮明に思い出される。そして裏手には、中津川の清流が瀬音をたてて流れており、ここで、毎年毎年後輩を迎えながら五星霜、中学生の青春の日を送つたことになる。

当時盛岡には、男子の中学校として盛岡中学校一校のみであつた。創立者の先代三田義正氏はこの新しい学校の教育について、一見識をもつており、理想的な人間教育、人格教育を理念としておられた。初代の校長は、岩手県出身で、当時他県の師範学校の校長をしており、東京帝国大学哲学科出の鈴木卓苗先生で、校主の要請で招へいされてきた。

鈴木校長は、中学生の我々にも、立派な人格者にみえた。温容で、従容、泰然とした大僧正の風格があつた。建学の理念を具現するにはもつとも

ふさわしい人物であつたに違いない。校長は、生徒にガムシヤラに勉強を強いるということよりも、まずは、人間として、いかに人格を陶冶し練磨し豊かな人間をつくるかということに力を注いでいた。週一度の校訓、そして修身の精神教育は、凜として、気品のあるもので、一種独特の雰囲気があつた。校長の教育思想の源流は、専門の東洋哲学、印度哲学の深遠な学理から脈々と流れていたものに違いないとあとになって思った。大変、わかりやすいように、平明に話しをするのであるが中学生の我々には、ややもすれば、難解な点もあつた。しかし大人になつてからの、私の精神構造に少なからず影響を与えていたことは否定できない。校長は、授業を始める前に必ず静座を行なつた。眼を軽く閉じ、掌を腹部にあて、一呼吸々々々に全精神を集中して、心の騒ぎを鎮め、雑念を払つてから授業に入るのであつた。

後年、私が群馬県の中学校教諭時代に、この静座を生徒達に試みたものである。途中眼をハッキリ開けて、ウストラ笑いをして不逞の生徒めがけて投げたチョークがまじめにやつてる隣の生徒に当つて静座をシラケ、さしたお粗末もあつたが、在任中はズーツと続けたものである。

当時学校の方針は、飽くまでも、人格教育に重点を置き、健康で豊かな人間をつくるということであつたので、精神面のみならず、体力の練成にも大いに意を注がれ、健全な身体、健全な精神が求められたのである。そこで、全校あげてのクロスカントリース——おそろく県下で初めて試みたものである——全生徒による兎狩り、学校農場での額に汗しての勤労、スポーツとしてラグ